慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	P・エケ著 小川浩一訳『社会的交換理論』
Sub Title	Peter P. Ekeh, Social exchange theory
Author	霜野, 寿亮(Shimono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.8 (1980. 8) ,p.157- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800815-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

若干の問題もないわけではない。プライベート・ペーパーに依拠するあまり、例えば南次郎の果した役割が強調され過ぎていはしまいか、細かくフォローし過ぎたあまり、人事移動、人脈に関心を集中し権力闘争のため離合集散が常であるグループ「気の合つた同士」の集合体を「政策のための単位」として過大評価した点があるのではないか。

さらに欲を言えば、本書の成立について詳細な説明がほしい。「年報近代日本研究」の第一巻である以上、編者となつている近代日本研究会とはいかなる組織なのか、本書が刊行されるにいたるまでのテーマの選択、定例研究会の開催、原稿の相互調整などがどう行われたのかまた今後同研究会はいかなる研究を行うのか、本書をひもとく者にとつて誰しも知りたい点であろう。そうした問に応えるには伊藤隆氏の編集後記は簡単に過ぎる。

本書については、『軍ファシズム運動史』をはじめ「軍部」研究の先駆的業績のある秦郁彦氏、防衛庁戦史部の波多野澄雄氏などが近く批評の筆を執ると聞いている。専門的立場からの書評は両氏に譲りたいが、本書の刊行によつて日本における「軍部」研究が質、量共に一層推進されたことを喜びたい。

（山川出版社・一九七九年・三五〇〇円）

池井　優

Peter P. Ekeh
Social Exchange Theory

『社会的交換理論』

P・エケ著
小川浩一訳

社会学は進歩してきたのであろうか。社会現象を理解しようと試みるとき、この素朴な疑問を感ずることが往々にある、これには二通りの答を得ることができるであろう。社会学の展開をふりかえれば、諸理論の出現に裏づけられて社会現象全体の考察がある程度可能になると共に、特殊な社会関係の解明はなしうるようになつてきている。産業社会学の貢献などが後者の典型であり、社会の特定領域ないし特定集団内における人間関係については、応用可能な経験的知識と技法とを社会学は所有しているのである。それゆえ、社会学の発展をこうした側面に見出すのであれば、先の疑問に対して肯定的に答えることができよう。また、構造機能主義や社会体系論などの諸理論は、不十分ながら、現にある社会全体の仕組をかなりの程度まで解明することはできるのである。この点についても、初期社会学からみれば一段の進展であるとみることができよう。しかしながら、これまでの社会学が成果をあげてきたのは、極めて部分的な領域における研究であるか、社会全体に関する限定された理論構

築であるという気持も否めない。今日支配的である社会学的機能主義においても、個人と社会との関係という最も肝腎な点が曖昧になつてしまつているのである。すなわち、方法論上の個人主義と集合主義の対立が止揚されぬまま、理論構築されてきているのである。この点に注目するならば、現在の社会学理論といえども、初期社会学の理論水準と同一であると考えざるを得ず、先の疑問には否定的に答えるより仕方がないことになる。

個人が社会を支えているのか、社会が個人を作りあげているのか。社会は個人にまで分解することが可能なのか否か。こうした問いかけには、社会に関する唯名論と実在論の論争から心理還元主義と創発主義の対立に至るまで数多くの視角が提出されてきている。だが、個人主義と集合主義の長い論争によつても、議論が決着しているわけではない。社会学の原点はあいかわらず不安定なのである。それにもかかわらず、現在まで理論は構築されてきたし、これからも構築してゆかざるを得ないのである。雨露をしのぐためには土台なき家にでも住め、また住まざるを得ないのと同様に、不安定状態に立脚する理論でも社会現象の説明は可能であり、わかる範囲で理論構築せざるを得ないのである。しかし、このようなやり方では、社会現象の説明に際し、社会現象の一部を巧妙なからくりによつて理論の前提に置いてしまう危険も多いのである。そして理論が洗練され一般化される度合が高まるにつれ、このような傾向も増大するが、それと同時にそうした傾向に対する反省も強まるのである。つまり弱体な理論基盤に反撥して社会学の原問題に対する回顧や新たな模索が出現してくるのである。いま社会学を眺めてみると、理論の再検討期に入つてきているように思われる。これが、社会学的機能主義の停滞やそれに代る新理論の未完成という閉塞状況と深くかかわることは言うまでもない。こうした状況のなかで、謂うなれば、本書も原点への回帰を目ざしたものとみなすことができよう。そこでは、社会学的機能主義の克服をめざす理論のひとつである社会的交換理論について、知識社会学的観点から代表的理論を検討しつつ、個人主義と集合主義の橋わたしを試み新しい方向をさぐる作業がなされている。なお訳者のあとがきによると、著者は本国で経済学と人類学を、米国で社会学を学んだナイジェリア出身の研究者であり、現在はアーマド・ベロ大学の社会経済研究センターの主任研究員の地位にある。簡単に内容をみてゆくことにしたい。

本書は四部八章からなつている。第一部は問題の提起と背景説明、第二部は全体主義的交換理論の検討、第三部は個人主義的交換理論の検討、第四部は論点の整理という構成である。

さて第一部は第一章と第二章からなる。第一章では、社会学のなかに個人主義的志向と全体主義的志向という二つの伝統の根づいていることが示される。すなわち、イギリスにおいてはスペンサーから始まる個人主義的社会学が中心であり、フランスではデュルケムを始めとする全体主義的社会学が主流を占めてきたと言う。そして、この対立は現在の研究者にまで尾を引いているが、方向をみれば社会学理論は両者の統合に向つてきている。しかしながら、両者の結

合にはこれまでのところ無理が多く、綻びをみせている、としている。第二章では、社会人類学ないし文化人類学と呼ばれる領域での研究においても、個人主義と全体主義という対立のみられることが、三人の研究者による交換行動の理論でもつて例証されている。著者はまずフレーザーに注目する。彼は親戚行動と結婚行動、すなわち交叉いとこ婚の研究によつて、最初の社会的交換理論の提示者となつたのであり、それは行為者の経済的動機を強調する個人主義的性格が強いものであつた。次はマリノフスキーである。彼はトロブリアンド島におけるクラ交換が経済的動機によつては説明されえぬとし、経済的交換と社会的交換とを明確に区別した点が評価に値するという。すなわち彼は社会的交換を支えるものとして個人の基本的心理的欲求を導入するのである。この意味ではマリノフスキーも個人主義的な交換理論家なのである。最後にモースが登場させられている。彼は社会的交換の担い手を社会集団のために行為する人間と規定することによつて、全体主義的枠組のなかで社会的交換を捉えると共に、社会交換過程から生ずる道徳性を強調する点に特色があるのである。

第二部は第三章と第四章からなる。第三章ではレヴィ＝ストロースの構造主義が全体主義的交換理論の事例として紹介されている。それによると、彼は人間精神のなかに集合的属性を措定し、そのあらわれとして集合的社会現象があるとする。これは創発性の概念すら必要としない全体主義的志向であり、このことは基礎的社会の考察によつて集合的現象は解明されうるとしていることによつても明らかである。またこうした志向が、社会的交換の説明においては反経済的・反心理学的立場となつてあらわれている。彼にとつて、行為者の個人的側面でなく社会的側面が重要なのであり、個人の外部にある、たとえば互酬性の原則が交換過程を基礎づけているのである。そして著者は、互酬性ないしは参与者数を基準としてレヴィ＝ストロースが行なつた限定的交換（当事者二人、利益の直接授受）と一般化された交換（当事者三人以上、利益は順送りされる）の分類を精緻化すると共に、限定的交換では道徳性が崩壊しやすいのに対して一般的交換では人々の信頼する道徳が生じやすいと論じている。第四章では、社会的交換の型と社会的連帯の型との関連が扱われている。ここで意図されているのは、社会的交換が生みだす（道徳に基く）統合過程を、社会の分化と連帯に関連づけることである。それによれば限定的交換は社会体系単位の機械的統合にすぎない構造的統合を含むが、一般化された交換は機能的単一性を高め創発的機能も生みだす機能的統合を含むのである。ここから展開される有機的連帯と社会的交換の統合過程に関する議論はやや生硬かつ難解であるが、著者の言わんとするところは、社会過程の分析を行なう場合、社会構造の変動をみるだけでは不十分であり、機能そのものの変化、特に新しい機能の発生に注意を払う必要があるということのようである。

第三部は三章からなつている。第五章ではホマンズの交換理論の特色が記される。彼の交換理論の特色としては、一般化された交換の概念を排除したこと、社会的交換の功利的属性を強調したこと、

心理的欲求と経済的欲求を組み合わせたことが指摘されている。さて、彼は心理還元主義者として知られているが、著者はその方法に疑問を持つと同時に、ホマンズの交換理論の前提に人間行動と動物行動の同一視があることを問題とする。なぜなら、多少の重複はあるものの動物行動の基本は条件的行動であり、人間行動の基本は象徴的行動である。従つて、前者から後者を類推することは完全にはできないのである。そして、ホマンズ自身この点に気づいており、それゆえに彼の交換理論すなわち行動心理学が経済理論と結びつくことになつたとする。しかしこの結果、交換理論の主要概念である報酬概念に、過去の経験を強調する心理的報酬と将来の予測と計算を重視する経済的報酬が含められてしまい、それらを同等視する混乱をもたらしたと著者は評価している。第六章では前章に続きホマンズが検討されている。ホマンズの交換理論の特色に分配正義の原則があることは良く知られているが、著者はこの原則が彼の交換理論のなかで極めて異質のものであると考えている。つまり、この原則は彼の『社会的行動』において五番目の原則として出てくるのであるが、四番目までの原則は個体内比較を行なう利得的交換を扱い、これは対人比較を行なう公平な交換を扱つている。しかもホマンズは両者の接合に失敗しているので、限定的交換では公平な交換が、一般化された交換では利得的交換が優勢であると整理する必要があるという。また、交換行動を規範的行動とみることをしないホマンズの理論枠組では、分配正義の概念が交換理論の枠外に置かれてしまう結果になると指摘している。第七章ではホマンズとの対比でブラウが考察されている。「ブラウの社会的交換モデルは経済的人間行動である。ホマンズの社会的交換モデルは経済的ハトの行動である」（二〇九頁）と著者は書いている。これからもわかるようにブラウの考える社会的交換は経済的交換にほかならず、かつまた限定的交換の理論であると性格づけている。確かに彼は間接的交換の概念を用いて社会集団一般への交換理論の応用を意図しているのであるが、それは行為者である交換相手にかわつて社会規範が交換の当事者になることを意味するにすぎないのであつて、間接的交換が個人的交換であることに変りはないと著者はみるのである。そして、彼の交換理論、なかでも権力現象の扱いはフレーザのそれに類似することを指摘し、ブラウが交換理論の個人主義的立場を促進したと評価している。

第四部には第八章が割り当られている。ここでは社会的交換理論の基本的論点が五つ挙げられ、それに対する各研究者の見解と著者の考えが示されて結論とされている。これらを項目的に示すことで紹介を終えることにしよう。(a)社会的交換理論のうちには経済的動機を肯定するものと否定するものの二種類がある。(b)同様に互酬性についても単一的互酬性と相互互酬性という二通りの考え方が存在している。(c)限定的交換と一般化された交換を区別することが交換理論にかぎらず社会理論にとつて大切である。(d)社会的交換理論のなかで搾取あるいは権力の概念を考えることは、交換関係の常態を平等とみるか不平等とみるかにも関係しており、重要である。(e)社会的連帯の概念を相互互酬性と限定的交換から抽出することはでき

ない。それは単一的互酬性と一般化された交換から引き出しうるのである。

以上の粗いまとめで内容をどれだけ正確に紹介できたか覚束ないが、本書が社会的交換をめぐる主要理論の骨子を丹念かつ系譜的に検討していることは理解していただけたことと思う。この意味で本書は今日の交換理論がかかえる論点の整理と明確化の書物であり、交換理論に関心を寄せる研究者の知的想像力をかきたてるのに役立つにちがいない。著者の立場は、ホマンズの批判において特にきびしく、個人主義よりも全体主義による交換理論を志向していると考えられるが、すでに紹介した論点の確認は的確である。さらに、随処に興味深い指摘もしているのである。たとえば、筆者にとつて面白かつたのは、アメリカ社会学をどちらかといえば個人主義的伝統に近いと位置づけたこと、パーソンズのＡＧＩＬ理論では異種機能の出現を説明しえないとしている点などである。このように、本書には幾つかの新鮮なアイディアもあり、交換理論の問題点を洗い出す作業には成功しているのであるが、著者自身の解答――全体主義的視点からの交換理論の統合――が十分示されていないのはいかにも残念である。また細かな点では著者の議論に対して疑問がないわけではない。たとえば、個人主義的伝統と全体主義的伝統という方法論上の差異の源泉を宗教的背景の相違に強く求めすぎているのではないか。また、社会的交換が社会的統合の機能をはたすようになる過程の説明が不十分であり、社会的連帯の概念と社会的交換の概念を接合させる論理の展開がかなり曖昧である。さらに、始め二人関係に基くものとされた分配正義の原則が後では間接的交換にまで拡大されなければならないと主張されるように読めるのである…。この点、筆者の誤解でなければこの二つの立場を連結する論理の架橋が不十分であるように思われる。

最後に訳について触れると、一、二の訳語に不満がないわけではないが、訳文は全体として大変に読みやすく、よく推敲されている。

（新泉社、二八七＋XV頁、一九八〇年）

霜野寿亮